

るといえる。『文部時報』第一〇七二号、一九六六年（貝塚茂樹編『戦後道徳教育文献資料集 三二巻』日本図書センター、二〇〇四年に再録）六二六三頁。

(11) 高坂正顕『人間像の分裂とその回復』八五頁。

(12) 西田幾多郎以来の日本の宗教哲学が宗教を「ノエシス」的方向において宗教を捉えてきたことについては、長谷正當の論考を参考のこと。長谷正當『日本の宗教研究と宗教哲学』『宗教研究』三四三三三、二〇〇五年。

(13) 『西田幾多郎全集 第四巻』（新版）岩波書店、二〇〇三年、三二六―三二八頁。西田の生命論と教育の關係については、以下の拙稿参照のこと。『西田の生命論』『いのちの教育』『西田哲学会年報』第四号、二〇〇七年。

(14) 文部省『道徳教育推進指導資料（指導の手引き）3 中学校 読み物資料とその利用——「主として自然や崇高なものとかかわりに関すること」——』大蔵省印刷局、一九九三年、三四頁。

(15) 同上書、四頁。

(16) 文部省『中学校 生命を尊ぶ心を育てる指導』一九八八年、八二―八三頁。

(17) 注(14)と同じ。

(18) 『塩狩峠』はさまざまな教材で取り上げられている。たとえば、愛知県小中学校長会編『道徳 明るい人生 3年』愛知県振興会発行、二〇〇四年。

(19) 「畏敬の念」を宗教的情操の基礎に置くことの問題性を菅原伸郎は、その著『宗教の教科書一二週』トランスビュー、二〇〇五年、付章「宗教教育の可能性」で簡明に記している。

(20) 同様な構造は国語の教科書にも認められる。この点に関しては、拙稿、「学校教育における〈死〉——小学校国語教科書にみる死生観——」『現代宗教2004』二〇〇四年、における作品「アニーとおばあちゃん」の分析を参照のこと。

(21) 代表的な著作として次のような書籍が挙げられる。磯前順一『近代日本における宗教言説とその系譜』岩波書店、二〇〇三年、島蘭進・鶴岡賀雄編『宗教』再考』ベリかん社、二〇〇四年。

(22) 島蘭進「規範的宗教理論と構造的宗教理論の相互關係」『日本宗教学会第六五回学術大会、パネル「近代日本と宗教学——複数性と系譜をめぐって——」』口頭発表(二〇〇六年)。

特集 宗教教育の地平

日本におけるキリスト教系学校の教育 ——その歴史と課題

はじめに

宗教や価値をめぐる問題、とりわけ宗教教育に関する問題は、教育学や教育現場においては長い間、タブーとされてきた事柄であった。しかしながらオウム真理教の事件やアメリカにおける九・一一の同時多発テロ以降、教育における宗教の扱いや宗教教育の問題について関心が高まり、盛んに論じられるようになってきている。

公教育における宗教教育が禁じられている日本において、戦後、宗教教育の実践が可能であったのは、私立の宗教系学校においてであった。その宗教系私立学校の中心で、仏教系学校を抜いて最も数が多いのがキリスト教系

の学校である。わが国におけるキリスト教系学校の歴史をふり返ってみると、明治維新後の再布教時からキリスト教の宣教師たちは多くの私塾や学校を設立し、教団としても教育活動を重視していたことが知られる。一方、政府は天皇制や皇国思想の浸透をはかるための努力をする中で、教育におけるキリスト教のそのような進出を警戒し、近代学校制度を整えていくに従って教育と宗教の関係を切り離していくための法整備を次第に進めていった。⁽¹⁾ その方針は戦争に突入するにつれてますます厳しいものとなっていったが、第二次世界大戦後には、公教育以外の私立学校における宗教教育は認められることとなり、現在に至っている。

佐々木裕子

ささき ひろこ

そのような流れの中であって、キリスト教系学校がどのような歩みを進めたのか、さらに、そこでなされてきた宗教教育の実践や直面している諸課題は何であるかにについて考えることは、現在われわれの目の前にある宗教教育をどう考えるかという問題を考えていく上での重要な材料を提供しているといえよう。また、諸外国における宗教教育のあり方はそれぞれの国のユニークな歴史と文化の中で独自の発展を果たしてきている。しばしば、わが国においてはキリスト教徒の数がカトリック、プロテスタント共に極端に少ないにもかかわらず、宗教系私立学校の中でキリスト教系学校の占める割合が多いことが取りざたされるが、そのことは日本のキリスト教系学校に自ずと欧米等のキリスト教国におけるキリスト教学校とは異なった在り方をもたらしてきたとも考えられるのではないか。

本稿では、このような問題意識のもと、近代学校制度が整っていく時代に始まった日本のキリスト教系学校の歩みとそれらが日本社会において果たしてきた役割を概観すると共に、今日、それらの学校が直面している課題

について考察していこうと思う。また、その際、教育史の中でもしばしば一般に「ミッション・スクール」としてひとくくりに扱われてしまいがちな、カトリック系学校とプロテスタント系学校との違いに留意しつつ、検討していくこととする。

一 日本の学校教育におけるキリスト教系学校

(1) 私立学校に占めるキリスト教系学校の割合
わが国においては、現在、小学校から大学まで三二〇〇余の私立学校が存在するが、キリスト系の学校の数小学校から大学まであわせるとカトリック系学校が三一四校、プロテスタント系学校が二九五校の計六〇九校となっており、私立学校のうち、約一八%がキリスト教系の学校である。⁽²⁾さらに宗教系学校のうちでキリスト教学校の占める割合はおよそ三分の二にもなる。⁽³⁾先にも触れたとおり、日本のキリスト教徒の人口がカトリック、プロテスタントをあわせても一%ほどしかないことを考えると、教育におけるキリスト教系学校の社会的認知度は、かなり高いものであるといえるであろう。

(2) 「ミッションスクール」という名称

さて、キリスト教系の学校は、カトリックであれプロテスタントであれ、一般に「ミッション・スクール」という名称で呼ばれることが多い。すなわち、この「ミッション・スクール」という言葉は、キリスト教に基づく教育を行う学校を指す名称として、漠然と理解され、用いられている。実際のところ、キリスト教系の学校に通う生徒たち自身もほとんどこの名称に抵抗や疑問はもっていないようである。とりわけカトリック系学校においては、この名称自体が取りあげられて議論されることはほとんどない。しかし、プロテスタント系の学校においては、歴史的な経緯もあってしばしばこの名称が取りあげられ、それと共にキリスト教主義学校としてのアイデンティティも絶えず問い直されてきた。そこで、まずここではわが国におけるキリスト教系学校の歴史を追う中で、この言葉の意味を確認しておきたい。

なお、「キリスト教主義学校」という言葉は主にプロテスタント系の学校を指すものとして限定的に用いられ

ることが多いことから、本稿ではキリスト教系の学校を全て含む概念として「キリスト教系学校」を用いることとする。

二 日本におけるキリスト教系学校の歴史

(1) プロテスタント系学校

ミッション・スクールという言葉が、プロテスタントもカトリックも含めたキリスト教系の学校一般を指すものとして広く理解されているのは、その歴史的背景によるとされる。すなわち、日本において明治初期設立されたほとんどのキリスト教系学校は、海外のプロテスタントのミッション・ボード(キリスト教伝道団体)からの援助で創立、運営されていた。⁽⁴⁾それゆえ、海外のミッション・ボードからの援助を受けていない日本人によって作られた学校も、一般にミッション・スクールという名称で呼ばれるようになったのである。つまり、本来的にミッション・スクールという名称は、「教育を通して伝道することを目的とした海外のミッション・ボードによって経営されている学校」という意味が内包されていた